

日本唾液腺学会

脳内血流量で把握

脳内の血流量の変化を計測して唾液分泌量を把握する「光学的唾液分泌計測法」を、日立製作所の牧淳氏が紹介した。1日に東京都文京区の文京学院大学で開かれた第57回日本唾液腺学会学術大会の「唾液はストレスマーカーの最適材料となりえるか」と題したパネルディスカッションで取り上げられた。

唾液分泌量の計測は、唾液をヒーカーに吐き出す方法や、口内に脱脂綿を入れて重量計測する方法、唾液腺に管を挿入して直接測る方法などがある。牧氏の紹介した「光学的唾液分泌計測法」は、顔の側面の唾液腺近辺に専用センサーを当てることにより、少ない負担で簡単に計測できるという

もの。微弱な近赤外光を頭皮上から照射することで、脳内の血液量変化を無侵襲で計測し、画像化する技術「光トポグラフィ法」を用いている。

飲料を摂取しながらもリアルタイムで血流が計測できるなど、今後このように活用していくかに注目が集まった。



パネルディスカッションでは、文京学院大学の山村弘治氏が「教育現場での唾液成分を用いたストレスマ

ーカーの活用法」で、同大学の栗原トヨ子氏が「高齢障害者の作業活動とストレスとの関連」で、東京医科歯科大

4人の演者に対して参加者からも多くの質問があったパネルディスカッション。大会ではその他、基礎と臨床に ついての一般講演発表も多くあった。鶴見大学歯学部 井上裕子氏による「カロリー制限による唾液分泌能改善効果の分子機構の解明」では、カロリー制限することで、唾液分泌が亢進し、酸化ストレスマーカーの減少や抗酸化物質の増加が見られることが報告された。

学 杉本久美子氏が「ストレス評価のための唾液成分と自律神経活動の分析」でそれぞれ話した。

下村氏は「アミラーゼ活性やコルチゾール濃度により、学生が感じるストレスは個人個人違うことを研究で確認。個別にストレスを把握するツールとして唾液検査の有用性を示唆した。

栗原氏は、特別養護老人ホームでの作業療法が与える効果について発表した。杉本氏は、自律神経活動とアミラーゼ活性の関係についての研究を紹介。総体的には相関関係は見られなかったとしたが、場面や用途に応じて使い分けられることが有効な結果が得られるのではないかと説明した。